

天草方言で読む【徒然草】

鶴田 功 〈訳文〉

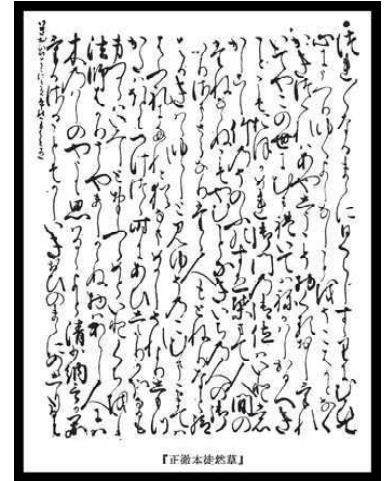
〈原文〉 吉田 兼好

序段

つれづれなるままに 日暮らし硯にむかひて
心にうつりゆく よしなしごとを そこはかたなく
書きつくれば あやしうこそ ものぐるほしけれ

〈意訳〉

退屈うしてすることもな—し 日の一日机に向こうて 心に案じつく
よしれんこっば 何ちゆて あてもものう 書付けよれば
妙なもん 気の狂うたごてなっソ



※徒然^{つれづれ} 心細く物思いに耽る することもなく物寂しい 退屈なさま つくづく つらつら
天草方言の「徒然なか」は物寂しい 退屈の意

〈原文〉

第一段

いでや、この世に生まれては、願はしかるべき事多かんめれ。御門^{みかど}のは、いとまかしこし。竹の園生^{そのふ}の、末葉まで人間の種ならぬぞ、やんごとなき。一^{おん}の人の御有様^{ありさま}はさらなり、ただ人も、舎人^{とねり}など賜はるきはは、ゆゆしと見ゆ。その子・うまごまでは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下^{しも}つ方は、ほどにつけつつ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

法師ばかりうらやましからぬものはあらず。『人には木の端のやうに思はるるよ』と清少納言^{いきおい}が書けるも、げにさることぞかし。勢^いまうに、ののしりたるにつけて、いみじとは見えぬ、増賀^{そうがひしり}聖の言いけんやうに、名聞^{みよもん}ぐるしく、仏の御教^{みおしえ}にたがふらんとぞ覚ゆる。ひたふるの世捨人^{せすてり}は、なかなかあらまほしきかたもありなん。

人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ、物うち言ひたる、聞きにくからず、愛敬^{あいぎよう}ありて、言葉多からぬこそ、飽かず向かはまほしけれ。めでたしと見る人の、心劣^{おと}りせらるる本性見えんこそ、口をしかるべけれ。しな・かたちこそ生れつきたらめ、心は、などが、賢きより賢きにも、移さば移らざらん。かたち・心ざまよき人も、才^{ざえ}なく成りぬれば、品下り、顔憎^{ほい}さげなる人にも立ちまじりて、かはずけおさるるこそ、本意^{ほんい}なきわざなれ

ありたき事は、まことしき文の道、作文・和歌・管絃の道。また、有職^{うしよく}に公事^{くじ}の方、人の鏡ならんこそいみじかるべけれ。手など拙^{おのこ}からず走り書き、声をかしくて拍子とり、いたまじうするものから、下戸ならぬこそ、男はよけれ。

〈意識〉

さて、人間としてこの世に生まれてきたからにゃ、だりっちゃ、こうありたかちゅて、願うこたあ山んごて仰山あるごたる。

最高位の天子様ン御位は、どうのこうの申し上ぐっともえらい畏れ多かこつ。また、皇子さまや皇族様に至るまで、こりゃ人間界の血筋じゃかけん極めて尊かもんで、我々普通の人間が望むこつでもなか。

また、人臣として最高位のせつしやうかんぱく摂政関白のご様子のご立派なことは、言うまでもなか。それ以外の貴族っちゃ、朝廷から警護の武士バ付けて頂くごたる身分の人は、すごかて思う。その子や孫の代までは、例え官位は下がって落ちぶれたとしても、やっぱり上品で奥床しゅうあらず。それ以下の家柄ン者になれば、面々に我あが家柄に應じて運のゆう出世して、得意然としとる人っちゃ、我あがじゃ偉かて思うととじゃろばって、他から見とまこて情けにゃーもんじゃある。

貴族ン次に一般に尊ばれとるのは、僧侶じゃろばって、実際は、僧侶ほど羨ましゅうなかものもなかろう。「人からは、木のはしくれんごて、つまらんもんと思わるる」ちゅて清少納言が書いとらすともまこて、ごもつともなことじゃある。

威勢のゆうして、名声の高っかからちゅて、優れとるとは限らん。却って、ぞうがしやうにん増賀上人も仰ったごて、名声は僧侶にとっては煩わしかもんで、真の仏の教えには背いとるごて思わるる。

そが僧侶ではのうして、ひたすら仏道に精進して、俗世バ捨てた出家者にゃ、却って好ましかところがあつとじゃろう。

人間ちゅうもんナ、家柄身分た別ちい、容貌てろん態度ン優れとつとが望ましかもんじゃある。

ちょっと話しばしただけん、聞きにくうなく、愛嬌ンあつて、ことば少のう控えめならば、いつまで対応しとつても飽かん。

ちょっと見た目にゃ、如何にも優れとるごて見ゆる人でん、ことばン端や物腰・態度なんか、つい下劣な本性が現れたりすつと、本てえ、がっかりさせらるる。

人柄とか容貌は生まれ付きで、自分でにゃどがんしようもなかろうばって、心ン持ちようだけは、賢か上にも賢う持つていくこたあできんことンあろうかい。

そうは言うても、容貌も心ばえも立派な人っちゃ、そこに学問ちゅうもんがなかと、家柄も悪く、顔つきも下品な連中と交わつとつてさえ、訳もなく圧倒さるつとは、誠てえ残念でならん。

ちゅうごたる訳だけん、煩わしかこたあ、本格的な学問の道、作詞・和歌・音楽にも堪能で、また、故実てろ朝廷の政務・儀式てろにも通じて、人ン手本になつとにゃ、やわいかんこつじゃろう。

字も達者で、歌バ唄えば声に何となく趣があり、拍子バとつて唄い、酒バ勧むれば、恐縮したごて辞退はするばって、飲めば相当にいける方が、男としてはよか。

〈原文〉

第二段

いにしへのひじりの御代の政みよまつりごとをも忘れ、民の愁うれい、国のそこなはるゝをも知らず、万にきよらを尽していみじと思ひ、所せきさましたる人こそ、うたて、思ふところなく見ゆれ。

「衣冠いかんより馬・車にいたるまで、あるにしたがひて用ゐよ。美麗を求むる事なかれ」とぞ、九条殿の遺誠ゆいかいにも侍る。順徳院の、禁中の事ども書かせ給へるにも、「おほやけの奉り物たてまつは、おろそかなるをもつてよしとす」とこそ侍れ。

〈意識〉

昔ン聖天子の御代ン政治はきゃー忘れ、民衆の苦汁とか国が疲弊すつとも構わでにゃ、華美にして傲慢無礼ごうまんぶれいで傍若無人ぼうじゃくぶじんに威張つとつとは、全く情けにゃー、わきまえンなか人間じゃん。

「日常生活でにゃ、衣冠はもとより馬でん車でんありあわせでよか、美麗をもとめちゃいかん」ちゆて、右大臣藤原師輔公（九条殿）の遺誠にも言うとなす。順徳上皇も「天皇のお召し物は、簡素なものがよろしい」ちゆて書いとんなさる。

〈原文〉

第三段

方にいみじくとも、色好まざらん男は、いとさうざうしく、玉のさかづき 匣そこの当なき心地ぞすべき。

露霜つゆしもにしほたれて、所定めずまどひ歩き、親ありの諫めいさ、世そしの誇りをつゝむに心の暇なく、あふさきるさに思ひ乱れ、さるは、独り寝がちに、まどろむ夜なきこそをかしけれ。

さりとして、ひたすらたはれたる方にはあらで、女にたやすからず思はれんこそ、あらまほしかるべきわざなれ。

〈意識〉

すべての面に優れとっても、恋愛の情趣も解せんごたる男は、えらい物足らんもんで、珠玉で作った立派な杯に肝心な底が抜けとるごたる気持ちになるに違ゃーなか。

彼女に逢いに行くときに、夜中、露や霜に濡れそぼりながら、どこともなう彷徨さまよいつらきゃーたり、親ン忠告てろん世間の人ン避難いはかバ憚って、心にゆとりものうして、あれこれ思い悩んだり、そんなせ彼女に逢う機会は少のうして、独り寝する夜ばっかって、安眠することが少ないちゅうごたつがまた、却って面白か。

とは言うものの、好色一筋ちゅうとじゃなかばって、女の方から軽う見くびられることんなかごてすつとが、男として望ましかこつじゃある。

〈原文〉

第四段

後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、心にくし。

〈意識〉

後の世ンことば心に持ち続けて忘れんごって、仏の道に疎くなかとは実に奥ゆかし
か。

〈原文〉

第五段

不幸に憂に沈める人の、頭^{かしら}おろしなどふつゝかに思ひとりたるにはあらで、あるか
なきかに、門(カド)さしこめて、待つこともなく明^{あか}し暮したる、さるかたにあらまほし。
頭^{あきもと}基中納言の言ひけん、の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。

〈意識〉

不幸におうて深か悲しみに沈うどる人が、ひっそりと暮らしとるごたるふうに控え目で
ありたかもんだ。

頭^{あきもとのちゅうなごん}基中納言が「配所の月バ罪なくして見たか」というたちゅうが、まったくそがんで
思う。

〈原文〉

第六段

わが身のやんごとなからんにも、まして、数ならざらんにも、子といふものなくてあ
りなん。

前^{さきのちゆうしよおう}中書王・九条太政大臣・花園左大臣、みな、絶えん事を願ひ給へり。染^{そめどの}殿も、「子
孫おはせぬぞよく侍^{はんへ}る。末のおくれ給へるは、わろき事なり」とぞ、世継のの物語に
は言へる。聖徳太子の、御墓をかねて築かせ給ひける時も、「こゝを切れ。かしこを断
て。子孫あらせじと思ふなり」と侍りけるとかや。

〈意識〉

我が身が高貴じゃったっちゃ、そうでなかったっちゃ、子は無か方が良かろうだネ。
前^{さきのちゆうしよおう}中書王九条太政大臣花園左大臣も、一族が絶えることば願うたし、染^{そめどの おとど}殿大臣も世
継の翁の物語に記しなした。聖徳太子も「子孫を絶えさせようと思う。」ち言いなした
ちちゆた。

〈原文〉

第七段

あだし野の露消ゆる時なく、鳥部山^{けぶり}の煙立ち去らでのみ住み果つる習ひならば、い
かにもものあはれもなからん。世は定めなきこそいみじけれ。

命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。かげろふの夕べを待ち、夏の蟬の春秋
を知らぬもあるぞかし。つくづくと一年^{ひととせ}を暮すほどだにも、こよなうのどけしや。飽か
ず、惜しと思はば、千年^{ちとせ}を過すとも、一夜^{ひとよ}の夢の心地こそせめ。住み果てぬ世にみにく
き姿を待ち得て、何かはせん。命長ければ辱多し。長くとも、四十^{よそじ}に足らぬほどにて死
なんこそ、めやすかるべけれ。

そのほど過ぎぬれば、かたちを恥づる心もなく、人^いに出で交らはん事を思ひ、夕べの

陽に子孫を愛して、さかゆく末を見んまでの命をあらまし、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののあはれも知らずなりゆくなん、あさましき。

〈意識〉

ずっとこの世に住んどらるるもんなら、人間の繊細な情趣てろ、人生の機微てろん、自然の美的観照ちゆうたもんもなかじゃろう。この世は無常じゃばって、そりもまたすばらしか。

命あるもんのなかで、人ほど長生きのものはなか。かげろうは夕を待たでにゃ死ぬし、蟬は春秋バ知らん。

いつまっでん物足らでにゃ千年もすごしたっちゃ、たった一夜の夢ンごたる心地がすっどだ。

いつまっでん住んどらるるわけじゃなかこの世に、醜っか姿バ迎えたところで何になろうきゃ。命長ンかれば、辱も多か。

〈原文〉

第八段

世の人の心惑はす事、色欲には如かず。人の心は愚かなるものかな。

匂ひなどは仮のものなるに、しばらく衣裳に薫物すと知りながら、えならぬ匂ひには、必ず心ときめきするものなり。九米の仙人の、物洗ふ女の脛の白きを見て、通を失ひけんは、まことに、手足・はだへなどのきよらに、肥え、あぶらづきたらんは、外の色ならねば、さもあらんかし。

〈意識〉

人間の心バ惑わすとに色欲に優るものはなか。まこて、人間の心ちゆうもんナ馬鹿なもんじゃある。

香の匂いなんちゆうもんナ、ただそれっきりなもんで、元来何の値打ちもなかもんじゃばって、ほんのちょこっとばかり衣装に炊き込めてあるばかりじゃばって、何とも言えんよか匂いにゃ、どうしてでん心ときめくもんじゃある。

久目の仙人が川で濯ぎものしとる女ン白か脛バ見て神通力バ失うたちゆうことじゃが、まこて、手足や肌ン美しゅう肥えて脂ンのとっとは、他ン普通の色合いと違うて内から輝き出たもんだけん、神通力失うとも尤もなこつじゃろう。

〈原文〉

第九段

女は、髪のみでたからんこそ、人の目立つべかんめれ、人のほど・心ばへなどは、もの言ひたるけはひにこそ、物越しにも知らるれ。

ことにふれて、うちあるさまにも人の心を惑はし、すべて、女の、うちとけたる寝もねず、身を惜しとも思ひたらず、堪ふべくもあらぬわざにもよく堪へしのぶは、ただ、色を思ふがゆゑなり。

まことに、愛著の道、その根深く、源遠し。六塵の樂欲多しといへども、みな厭離

しつべし。その中に、たゞ、かの惑ひのひとつ止めがたきのみぞ、老いたるも、若きも、智あるも、愚かなるも、変る所なしと見ゆる。

されば、女の髪すぢを縫れる綱には、大象もよく繋がれ、女のはける足駄にて作れる笛には、秋の鹿必ず寄るとぞ言ひ伝へ侍る。自ら戒めて、恐るべく、慎むべきは、この惑ひなり。

〈意識〉

女の人は、髪が綺麗かとか先ず第一に人目バ引くごたる。そんな人の身分とか情操などの方は話バしとる様子で、物バ隔てとつても察することん出来る。

何かの折りに、ただ、何気なくしている姿態にも人ン心バ惑わする。一般的に言うて女人人というもんな、寝っ時も気バ許して寝んし、骨身バ惜しむ気もなか、到底我慢できんごたることんでん、ゆう堪え忍ぶとは、こりゃ、ただただ男に対する自分の魅力ンことば考えとるけんじゃろう。

まこて、愛欲ちゆうことは、そんな根元な深く遠く、もって生まれた本能的なもんじゃろう。

色・声・香・味・触法の六つの官能に基づく欲情はどうかばって、これらは、努力によっちゃみんな離脱するこつがでくる。そんな中で、色欲の迷いだけがやめがたかとは、老若賢愚、みな一緒ごたる。そう言うわけだけん、女ン髪で振って作った縄には大象も容易う繋がるる。

女の履いた下駄の板で作った笛の音バ聞けば、妻恋う秋の鹿が必ず慕い寄ってくるちゆう言い伝えがある。自戒して怖れ慎まんバならんとは、まこて、この色欲の迷いばな。

〈原文〉

第十段

家居のつきづきしく、あらまほしきこそ、仮の宿りとは思へど、興あるものなれ。

よき人の、のどやかに住みなしたる所は、さし入りたる月の色も一きはしみじみと見ゆるぞかし。今めかしく、きらゝかならねど、木立もの古りて、わざとならぬ庭の草も心あるさまに、簀子・透垣のたよりをかしく、うちある調度も昔覚えてやすらかなるこそ、心にくしと見ゆれ。

多くの工の、心を尽してみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ調度ども並べ置き、前栽の草木まで心のままならず作りなせるは、見る目も苦しく、いとわびし。さてもやは長らへ住むべき。また、時の間の烟ともなりなんとぞ、うち見るより思はるゝ。大方は、家居にこそ、ことざまはおしはからるれ。

後徳大寺大臣の、寝殿に、鶯みさせじとて縄を張られたりけるを、西行が見て、「鶯のゐたらんは、何かは苦しかるべき。この殿の御心さばかりにこそ」とて、その後は参らざりけると聞き侍るに、綾小路宮の、おはします小坂殿の棟に、いつぞや縄を引かれたりしかば、かの例思ひ出でられ侍りしに、「まことや、烏の群れみて池の蛙をとりければ、御覧じかなしませ給ひてなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと覚えしか。徳大寺にも、いかなる故か侍りけん。

〈意識〉

住居ンゆう調和ン取れて感じのよかとは、この世の仮の宿とはいえ興味ンあることば
い。

身分の高こうして教養ンある人が、ゆたっと古風な感じで住んどらすとは、実に奥ゆ
かしか。ばって、珍しか調度品バ並べたり、前裁まで手バ加えて作ってあつとはいただ
けん。住まいによっちゃ、心ンほどが推測でくる。

後徳大寺大臣が、寢殿に蔦バとまらせんごて縄バ張ったとば西行が見て、その後は参
上さっさんじゃったと聞いたが、綾小路宮あやのこうじの小坂殿の棟に、いつじゃったか縄バひいた
ことがあって、先ほどン例が思い出されたばって、からすが池ン蛙バ捕っとバ見て可愛
そうに思うてさしたちゆて人から聞いて、そんなろばりっぱなこつじゃと思うた。徳大
寺殿にも、何か特別の理由のあったっじゃろうだ。

〈原文〉

第十一段

神無月のころ、栗栖野くりすのといふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事侍りしに、遥かなるこけ苔
の細道を踏み分けて、心ぼそく住みなしたるいおり庵あり。木の葉に埋もるゝ懸樋かけひの霰しずくなら
では、つゆおとなふものなし。閼伽棚あかに菊・紅葉もみじなど折り散らしたる、さすがに、住む
人のあればなるべし。

かくてもあられけるよとあはれに見るほどに、かなたの庭に、大きなこうじ柑子の木の、
枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく囲ひたりしこそ、少しことさめて、この木
なからましかばと覚えしか。

〈意識〉

陰曆十月ころ、栗栖野ちゆう所バ通って、ある山里に訪ねて行たことンあった。

苔生えた細道に、静かな庵のある。閼伽棚あかに菊とか紅葉が折って置いてあつとは、
人ン住んどるけんじゃろう。

しみじみ感じ入って見とれば、あちん庭に実のいっぴゃなつた、大か蜜柑みかんの木のあ
つて、その周りバしっかり囲うてあつたとが、ちった興ざめで、こん木の無かればにゃ
あて、思うた。

〈原文〉

第十二段

同じ心ならん人としめやかに物語して、をかしき事も、世のはかなき事も、うらなく
言ひ慰まんこそうれしかるべきに、さる人あるまじければ、つゆ違たがはざらんと向ひみた
らんは、たゞひとりある心地やせん。

たがひに言はんほどの事をば、「げに」と聞くかひあるものから、いさゝか違たがふ所も
あらん人こそ、「我はさやは思ふ」など争ひ憎み、「さるから、さぞ」ともうち語らば
は、つれづれ慰まめと思へど、げには、少し、かこつ方も我と等しからざらん人は、大
方のよしなし事言はんほどこそあらめ、まめやかへたの心の友には、はるかに隔たる所のあ

りぬべきぞ、わびしきや。

〈意識〉

心ン合う友達と、しんみり話し合うて風雅なことてん、ちょっとした世間話でん裏表なしに打ち解けて話し興じてこそ嬉しか筈ばって、そがん人は滅多やおらん。

相手ン言うことにゃ少しでん反対せんごて用心して、向かい合うとれば二人で話し合う甲斐はなか。まっで、一人でおっとと一緒。

お互いに話し合うことは、なるほどと一応は耳バ傾けて聞くだけのことはあるばって、自分とちっと意見の違う所がある人が「自分はどうもそうは思わん」ちゆて頑かたくなに論争して「こがんだけんこがん」てろんいうと、なるほど退屈しのぎにゃなろうばって、実際にゃ、この世ば少しはかなむちゅう方面も自分と一致しとらん人は、一般的なつまらん話し相手としてなろうば、それも良かろうばって、本当の心の友にゃ遙かに及ばんところんあつとは、侘びしか話じゃある。

〈原文〉

第十三段

ひとり、ともしび燈のもとにふみ文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は、もんぜん文選のあはれなるまき巻々、白氏文集、老子のことば、南華の篇。この国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。

〈意識〉

一人で灯火のもとで読書しながら見知らん世界の住人を友とするごて、心なごむことはなか。

わたしの好きな本ナ文選（昭明太子）、はくしちんじゅう白氏文集（白居易の詩文集）、老子、南華の篇。日本の博士ン書ゃ一たとも、古かもんな良か。

〈原文〉

第十四段

和歌こそ、なほをかしきものなれ。あやしのしづ・山がつのしわざも、言ひ出でつればおもしろく、おそろしき猪のししも、「ふす猪の床」と言へば、やさしくなりぬ。

〈意識〉

和歌は面白か。ばってか、近頃ンとは言外に感じいるもんが無か。歌ン道は昔から変わらんちゅう事もあるばって、そがんじゃろうか。同じ詞・歌枕も昔ンもんな同じじゃなか。すなおで清うして、きょうしゆ興趣も深か。

〈原文〉

第十五段

いづくにもあれ、しばし旅立ちたるこそ、目さむる心地すれ。

そのわたり、こゝ・かしこ見ありき、おなかびたる所、山里などは、いと目慣れぬ事のみぞ多かる。都へ便り求めて文やる、「その事、かの事、便宜に忘るな」など言ひや

るこそをかしけれ。

さやうの所にてこそ、万に心づかひせらるれ。持てる調度まで、よきはよく、能ある人、かたちよき人も、常よりはをかしとこそ見ゆれ。

寺・社^{やしろ}などに忍びて籠りたるもをかし。

〈意識〉

どこっちゃよか旅バすつとは気分^{つらゆき}のすつきりする。あちこち見て歩けば、田舎や山里には見慣れんもんも多か。

都に住む家人へ、返事をだすごて手紙ばやる。「そんな事も、あの事も、万事都合ゆう。忘るんなぞ！」ち言ゆうてやれば面白か。旅先でこそ何にでん心遣いが必要になる。

余計な荷物はいらん。いるものはいるばって、いらんもんないらん。頭のよか人や美人ちゃ、旅先でにゃ普段より違うたおかしな様子ば見する。

都に手紙バ送つとも楽しか。寺社に人目し^{こもる}のんで隠とも楽しか。

比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、古き歌どものやうに、いかにぞや、ことばの外に、あはれに、けしき覚ゆるはなし。貫^{つらゆき}之が、「糸による物ならなくに」といへるは、古今集の中の歌^{うた}屑とかや言ひ伝へたれど、今の世の人の詠みぬべきことからは見えす。

その世の歌には、姿・ことば、このたぐひのみ多し。この歌に限りてかく言いたてられたるも、知り難し。源氏物語には、「物とはなしに」とぞ書ける。

新古今には、「残る松さへ峰にさびしき」といへる歌をぞいふなるは、まことに、少しくだけたる姿にもや見ゆらん。されど、この歌も、衆議判の時、よろしきよし沙汰ありて、後にも、ことさらに感じ、仰せ下されけるよし、家長^{いえなが}が日記には書けり。

歌の道のみいにしへに変らぬなどいふ事もあれど、いさや。今も詠みあへる同じ^{ことば}詞・歌枕も、昔の人の詠めるは、さらに、同じものにあらず、やすく、すなほにして、姿もきよげに、あはれも深く見ゆ。

梁塵秘抄^{りょうじんひしょう}の郢曲^{えいきよく}の言葉こそ、また、あはれなる事は多かんめれ。昔の人は、たゞ、いかに言ひ捨てたることぐさも、みな、いみじく聞ゆるにや。

〈原文〉

第十六段

神楽^{かぐら}こそ、なまめかしく、おもしろけれ。

おほかた、ものの音には、笛・筆^{ひちりき}。常に聞きたきは、琵琶^{びわ}・和琴^{わごん}。

〈意識〉

神楽は優雅で趣ン深か。楽器ン音は笛・筆^{ひちりき}がよか。いつでん聞きたかとは琵琶^{びわ}てろん和琴。

〈原文〉

第十七段

山寺にかきこもりて、仏に仕^{つか}うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。

〈意識〉

山寺にひきこもって仏に仕えとときこそ、心も清まる心地にする。

〈原文〉

第十八段

人は、己れをつゞまやかにし、奢^{たから}りを退けて、財^{むさぼ}を持たず、世を貪らざらんぞ、いみじかるべき。昔より、賢き人の富めるは稀なり。

唐土^{もちろし}に許由^{きよゆう}といひける人は、さらに、身にしたがへる貯^{たくわ}へもなく、水をも手して捧^{ささ}げて飲みけるを見て、なりひさこといふ物を人の得^{むす}させたりければ、ある時、木の枝に懸^かけたりけるが、風に吹かれて鳴りけるを、かしかましとて捨てつ。また、手に掬^{むす}びてぞ水も飲みける。いかばかり、心のうち涼しかりけん。孫^{そんしん}晨^{あした}は、冬^{おさ}の月^{しる}に衾^{とど}なくて、藁^{わら}一^{ひと}束^{つか}ありけるを、夕^ふべにはこれに臥^{あした}し、朝^{あした}には収^{おさ}めけり。

唐土の人は、これをいみじと思へばこそ、記^{しる}し止^{とど}めて世にも伝^{つた}へけめ、これらの人は、語りも伝^{つた}ふべからず。

〈意識〉

人は、質素^{しつそ}に贅^{ぜい}沢^{たく}せいでにや欲^ほづかんとがよか。昔から賢^{けん}か人が裕^よ福^{ふく}なこたあ稀^{まれ}たい。唐土^{もちろし}ん許由^{きよゆう}ちゆう人は、水も手ですくうて飲^のうどる風^{かぜ}で事^{こと}足りとったけん、瓢^{ひょう}筆^{ふで}しゃかもとらっさんじゃった。孫^{そんしん}晨^{あした}ちゆう人は冬^{ふゆ}でん藁^{わら}一^{ひと}束^{つか}で夜^よさりや寝^ねて、朝^{あした}はこりバナ^なえや一^{ひと}た。

唐土^{もちろし}ん人はこれ一^{ひと}感^{かん}心^{しん}して、後^ご世^せに伝^{つた}えたばってか、こっちん人は伝^{つた}えもされん。折^せ節^{せつ}の、移^{うつ}りかわっては、ものごとに趣^{おもむ}きあるよ。

何^{なに}某^{ごと}とかちゆう世^よ捨^す人^{にん}が「俗^{ぞく}世^せ間^{かん}には束^{むす}縛^{ばく}される縁^{えん}バ持^もたん身^みばってか、自然^{しぜん}への名^な残^{ざん}だけが惜^{おぼ}しまるる」ちゆうたが、まったくそん通りばい。

すべてん事^{こと}あ月^{つき}バ見てこそ慰^{なぐさ}められるもんばい。

〈原文〉

第十九段

折^せ節^{せつ}の移^{うつ}り変^かるこそ、ものごとにあはれなれ。

「ものあはれは秋^{あき}こそまされ」と人^{ひと}ごとに言^いふめれど、それもさるものにて、今^{いま}一^{ひと}きは心^{こころ}も浮^うき立^たつものは、春^{はる}のけしきにこそあ^あめれ。鳥^{とり}の声^{こゑ}などもことの外^{ほか}に春^{はる}めきて、のどやかなる日^ひ影^{かげ}に、墻^{かき}根^ねの草^{くさ}萌^もえ出^でづるころより、やゝ春^{はる}ふかく、霞^{かすみ}みわたりて、花^{はな}もやうやうけしきだつほどこそあれ、折^せしも、雨^{あめ}・風^{かぜ}うちつづきて、心^{こころ}あわたゝしく散^ちり過ぎぬ、青^{あお}葉^はになりゆくまで、万^{よろず}に、ただ、心^{こころ}をのみぞ悩^{なや}ます。花^{はな}橘^{たちばな}は名^なにこそ負^おへれ、なほ、梅^{うめ}の匂^{にお}ひにぞ、古^{いにしえ}の事^{こと}も、立^たちかへり恋^こしう思^{おも}ひ出^ででらるゝ。山^{やま}吹^ふの清^{きよ}げに、藤^{ふじ}のおぼつかなきさましたる、すべて、思^{おも}ひ捨^すてがたきこと多^{おほ}し。

「灌^{くわん}仏^{ぶつ}の比^ひ、祭^{まつり}の比^ひ、若^{わかしほ}葉^はの、梢^{こすえ}涼^{すず}しげに茂^もりゆくほどこそ、世^よのあはれも、人の

恋しさもまされ」と人の仰せられしこそ、げにさるものなれ。五月、菖蒲さつきふく比、早苗あやめとる比、水鶏くいなの叩くなど、心ぼそからぬかは。六月の比、あやしき家に夕顔の白く見えて、蚊遣かやりび火ひふすぶるも、あはれなり。六月祓みなつきはらえ、またをかし。

七夕祭るこそなまめかしけれ。やうやう夜寒よさむになるほど、雁かり鳴きてくる比、萩はぎの下葉色づくほど、早稲田刈り干すなど、とり集めたる事は、秋のみぞ多かる。また、野分の朝のわきこそをかしけれ。言ひつゞくれば、みな源氏物語・枕草子などにこと古りにたれど、同じ事、また、いまさらに言はじともあらず。おぼしき事言はぬは腹はらふくるゝわざなれば、筆にまかせつゝあぢきなきすさびにて、かつ破り捨つべきものなれば、人の見るべきにもあらず。

さて、冬枯のけしきこそ、秋にはをさをさ劣るまじけれ。汀みぎわの草に紅葉もみじの散り止りて、霜いと白うおける朝あした、遣水やりみずより烟けぶりの立つこそをかしけれ。年の暮れ果てて、人ごととに急ぎあへるころぞ、またなくあはれなる。すさまじきものにして見る人もなき月の寒はつかけく澄める、廿日余りの空こそ、心ぼそきものなれ。御仏名のさき、荷前つかいの使立つなどぞ、あはれにやんごとなき。公事くじども繁しげく、春の急ぎにとり重ねて催もよおし行はるるさまぞ、いみじきや。追ついな躰たより四方よなか拜かに続つくこそ面白おもしろけれ。晦日つごもりの夜、いたう闇くらきに、松どもともして、夜半過ぐるまで、人の、門叩かどき、走りありきて、何事にかあらん、ことごとしくのゝしりて、足を空に惑まどふが、暁あけがたより、さすがに音ねなくなりぬるこそ、年の名残も心ぼそけれ。亡き人のくる夜とて魂たま祭まつるわざは、このごろ都にはなきを、東あずまのかたには、なほする事にてありしこそ、あはれなりしか。

かくて明けゆく空のけしき、昨日おちに変わるとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。大路おちのさま、松立てわたして、はなやかにうれしげなるこそ、またあはれなれ。

〈意識〉

季節の変化んごて面白かものはなか。

「秋んごて素敵すてきな季節きせつはなか」という人は多か。確かにそうかもしれんばって、春の景色けしきは見るときの感動かんとくはそれ以上いじやうでわたしは思う。春の鳥とりがさえずり始め、おだやかな光ひかりが差し込み、垣根かきねの下したに雑草ざさくさが生えだす。それから、あたりに霞かすみがたなびくようになれば桜さくらが咲さき始はじむと。

ところが、ちょうどその頃に雨あめが降りつづいて、桜さくらは気きぜわしく散ちってしまう。そして、新緑しんりょくの季節きせつの到来とらい。どれも心こころ浮うき立たつことばかりである。花はなは橘たちばなて言うばって、昔むかしのことを思おもはずとは香かほり高たかか梅うめの花はなだ。それに清楚せいじゆな山吹やまぶきの花はな、しなやかな藤ふじの花はな、どれも捨すてがたか。

「木き々の枝葉えだが青あお々と茂さかる灌かん仏ぶつ会えや葵あひ祭まつりのころこそ、逆にこの世よの悲かなしさ切きなさば痛いた感かんする」という人ひとがおるばって、わたしもその一人ひとりだ。菖蒲あやめを軒のきにさす端午たんごの節句せきぐや、田植いりえが始はじまるころに、水鶏くいなの泣なく声こゑを聞きくと切きなさが募もってくる。

真夏まなつの日の夕方ゆふぐれ、貧ひんしか家いへに夕顔ゆげんが白しろく咲さゃーて、蚊取かとり線香せんかうが煙けむりとる景色けしきもまた一興いちきやうだ。神社しんじで行いわれる夏越なつこしの祓はらいも面白おもしろか。

秋あきの七夕祭たなばたまつりは清楚せいじゆな魅力まじりがある。夜よは日毎ひごとに肌寒はだかさがまし、雁かりが鳴なきながら空そらば渡わたってくる。萩はぎの下葉したが色いろづき、稲いねば刈かりって干ひす光景ひかりも見みられる。秋あきは素敵すてきなものを数かず

えればきりがなか。台風の翌朝の空もまたよか。

こがんふうに数え上ぐつとは、まったく源氏物語や枕草子の二番煎じばて、同じ事をしていけないという法はなか。それに言いたいことを言わでにゃおると腹に悪かと言うから、筆にまかせて書いとつとたあ。どうせすぐに破り捨つる気晴らしの産物だけん、人に読んでもらうつもりはなか。

冬の景色も決して秋に負けとらん。水辺の緑の上に紅葉が散り残つとる光景、霜が降りて真っ白になった朝の景色、庭の小川から蒸気が立ち上っているところなんかは、なかなかのものばい。

師走に人がせかせかしているのを見つとは、最高に愉快だ。二十日すぎの寒々として澄み切った空に誰も振り向かんごたる荒涼とした月が出とつとを眺むるときの切なさといつたらなか。

宮廷で^{ぶつみようえ}仏名会が行われたり、^{のさき}荷前の勅使が出つとは、また格別な見物である。そがん儀式が正月の準備の間に立て続けに行わるつとが面白かつたい。大晦日の夜に^{ついな}追儺の儀式があると思うと元日の朝にはもう^{しほうはい}四方拝の儀式が行わるる、このあわただしさがどもこもよかつたい。

〈原文〉

第二十段

^{なにがし}某とかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ、空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、まことに、さも覚えぬべけれ。

〈意識〉

誰じゃったかある世捨て人が「わたしはもうこの世には何も思い残すことはなかばつて、ただ、この空に別れを告げるのだけはさびしか」と言ったが、まったくわたしも同感ばい。

〈原文〉

第二十一段

^{よるす}万のことは、月見るにこそ、慰むものなれ、ある人の、『月ばかり面白きものはあらし』と言ひしに、またひとり、『露こそなほあはれなれ』と争ひしこそ、をかしけれ。折にふれば、何かはあはれならざらん。

月・花はさらなり、風のみこそ、人に心はつくめれ。岩に砕けて清く流るる水のけしきこそ、時をも分かずめでたけれ。『元・湘、日夜、東に流れさる。愁人のために止まること小時もせず』といへる詩を見侍りしこそ、あはれなりしか。けい康（けいこう）も、『山沢に遊びて、魚鳥を見れば、心楽しむ』と言へり。人遠く、水草清き所にさまよひありきたるばかり、心慰むことはあらし。

〈意識〉

どがんことがあっても、月さえ眺めておれば、気持ちが慰めらるるもんばい。ある人が、『月ほど面白かものはなか』と言えば、また別のひとりが、『露のほうに興味あ

る』と言うて言い争いになったっばってん、これも趣深いものじゃった。良か時期に当たらんば、それに趣深さがあるとは言えん（あはれとを感じる事象には、それを鑑賞するのに最適の時期があるのではないだろうか）。

月・花は言うまでもなかばって、風も、人の心を興趣へと揺り動かすものである。岩に当たって砕くる清く流るる水の景色は、季節を問わずに素晴らしか。『元・湘（中国の川）は日夜、東に流れ去っていく。愁えている人のために流れれば止むることば、少しの間もすることがなか』という詩を拝見致しましたばって、これは情趣がある。竹林の七賢のけい康も、（『文選』という古典の詩集の中で）『山沢に遊びて、魚鳥を見れば、心楽しむ』と言うとる。人は遠くに出かけて、水草の清い所ばさまよい歩くばかりでにや、心が慰めらるることもなかっどだ。

〈原文〉

第二十四段

齋宮の、野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事の限りとは覚えしか。「経」「仏」など忌みて、「なかご」「染紙」など言ふなるもをかし。

すべて、神の社こそ、捨て難く、なまめかしきものなれや。もの古りたる森のけしきもただならぬに、玉垣しわたして、榊に木綿懸けたるなど、いみじからぬかは。殊にをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布禰（きぶね）・吉田・大原野・松尾・梅宮。

〈意識〉

齋王が野宮におらす有様は優美で趣ある極みばい。すべて神社は心ひかるる優雅なもん。殊に趣あるとは、伊勢、賀茂、春日、平野、住吉、三輪、貴布禰、吉田、大原野、松尾、梅宮諸社ばい。

〈以後、原文省略〉

無常な世に昔バ語る、古か尊か場所ン跡はなんとも儂かもんばい。

京極殿・法成寺。御堂殿（藤原道長）が立派に作らしたばって、正和年間に南門な焼け、金堂は倒壊したまま。無量寿院だけが残っとる。行成大納言の額、兼行（源兼行）が書やあた扉ンあざやかに見ゆっとは情趣のある。法華堂などもまだあるばって、いつまであっちゃろうかい。何事も見る事ンでけん世まで、考えとくとは儂か事びや。

人ン心変わりして自分とは関係なかごてなってしまうとは、世の習いちゃいえ、悲しか事ばい。堀川院の百首和歌の中に、こがん一首がある。

むかし見し 妹が^{かきね}塙根は荒れにけり つばなまじりの^{すみれ}堇のみして

讓位ン儀式が行われて、三種の神器バお譲りすつときゃ心さびしかナ。花園上皇が位バ退きなした春、詠まれたちゅた。

殿守のとものみやっこ よそにして 掃はかぬ庭に 花ぞ散りしく

新帝の公務が忙しからすとにまぎれて、院のところさん来る人もなかつたとがさびしそうじゃらす。

諒闇^{りょうあん}の年ぐりゃ、感慨の深かこたなかるうだ。服喪ン始め十三日間こもる宮中の仮屋は質素で、廷臣たちの装束なんかも、いつもとちごうとつとは特別厳肅に感じらるる。

静かに考ゆれば、過ぎ去った昔が恋しかばっかりたい。

人ン寝静まってから、昔ン反古などば片づけてとれば、亡くなった人ン字てろん絵てろん出てきて、当時ンことが偲ばるる。故人が使うとらした道具なんかがそのまま変わらでにゃ残つとつとは悲しかことばい。

人ン死ほど悲しかこたなか。四十九日ン間、法要バ営んどつとは、気ぜわしゅう、すぐ過ぎてしまう。自分の住処^{すみか}に帰ってからが、悲しかて思うことが多か。

故人ナいずれ忘れられ、故人バ知つとる人もおらんごてなり、そんうちに墓も無かごてなってしまうとは、悲しかことばい。

雪ン降った朝、用のあつて人に手紙バ送ったりゃ、返事に「こん雪のことば一言も書かんでおる、ひねくれ者のいうことば聞かりゅうかい」と返事ン来た。今は亡き人のことだけん、こがんことも忘れられん。

九月二十日ンころ、ある人ン誘いで夜明けまで月バ見て歩ゅうだことんあつた。そん人は少し思い出ゃあたことんあつて、ある家に入らした。

そん人は程よかころに出てきたばつて、そん家の主人ナ出入り口バ少し開けて、月バ見とらす様子じゃつた。

こがん優雅な振る舞いは、平素ン心がけによるもんじゃろう。そん人はその後まものう亡くなつてもと聞いた。

現在の内裏^{だいり}バ造つたとき、有職の人々はどけも欠点ななちゅうたとに、玄輝門院^{げんき}が見たところ、閑院^{かんいん}の里内裏^{くしがた}の櫛形^{くしがた}ン穴が違つとつとバ指摘さしたとは、すばらしかことばい。

甲香^{かいこう}は、ほら貝ンごたる形で、ほら貝より小か、ロンあたりが細長う突き出とる貝の蓋^{ふた}たい。

字の下手な人が文バどどん書くとは良か。下手だからちゅうて人に書かすつとは良うなか。

「長か間、女性の家バ訪ねんじゃつたりゃ、女性の方から「下男^{おら}ナ坐すどかい。一人貸してくだせ。」ちゅうてよこした。思いがけものう、うれしかもんじゃある。そういう気立てを持つとる女性こそ好ましかもんじゃ」て、ある人が言うつたが、もっともなことばい。

毎日親しゅうしとる人が、何かん時に、あらたまつた様子に見ゆつと、教養ンある上品な人じゃねて思う。あんまり馴染みン深くなか人が、うちとけた話をすつとも、また、良か人だて思う。

名誉とか利益に使われて、静かな時間もなうして、一生苦しむとは愚かなことばい。財産の多かれば身バ守つとに事欠く。金は山にう捨てて、玉は淵に投ぐるがよか。利に惑うとは愚かな人ばい。

名バ長う世に残すとは望ましか。位が高う身分の尊かちゅうことだけば、すぐれた人ちゅうべきじゃろうかい。時勢で得た高っか位もあるだろばつて、賢人とか聖人で自ら

低っか地位に降りた人も多か。ただ高っか位バ求めるのも愚かばい。

つらつら思えば、名誉バ愛すっとは人ン評判バ喜うどったい。誉める人も、そしる人も世にやううかもん、伝え聞く人もまた、おらんごてなってしまう。こういう名誉バ願うとも愚かなこったい。

学んで知っとは本当の知じゃなか。不可は一つのもんでどっちを善というとか。まことん人は智もなく、徳もなか、功もなく、名もなか。誰も知らん、誰えも伝わらん。もともと賢愚・得失の境におらんけんたい。

すべての事はみな非ばい。言うに及ばん、願うに足らん。

ある人が法然上人ほつねんに「念仏のとき眠うなって行バ怠ることがあるが、どぎゃんしてこん障害バとったらよかでしょうかい」て申し上げたところ「目のさめとっときに念仏しなさい」て答えらした。なんとも尊かことだ。また「往生はできると思えばできる。でけんと思えばでけん」て言われた。これも尊かこと。また、「疑いながらでも、念仏すれば往生する」ともいわれた。これもまた尊かネ。

因幡国におらした何某入道とかいう人ン娘が大変綺麗して、多勢が求婚したばって、こん娘はただ栗だけば食うて、米ン類バ食べんじゃったけん「こがん変わった者な、結婚すべきじゃか」て、許さんじゃった。

五月五日に賀茂神社ン競馬バ見物したときに、大勢の人出で馬場に寄れんじゃった。そがん時、向こうおうちの棟ン木に登って木のまたで見物しとる法師がおらした。木に取り付きながら居眠りしとって度々落けそうにならした。こりバ見とった人々は「あぎゃん危なか枝ン上で、安心して寝とる馬鹿もおる」ちゅて笑うたり、あきれたりしとった。私は心に浮かんだままに「わしどんが生死の到来は、たった今あるかもしれん。そりバ忘れて見物して暮らしよるあんた達ン方が愚かさじゃまさっとなることもわからんかい」ちゅうた。前におった人たち「もっとも、そがんでござした」ちゅて、その場バ逃げ返った。

これくらいの道理は誰でん思い付くばって、折りから思いがけなかったけん胸にあたったじゃろう。人は木石では無かけん、時によっては物に感ずることが無かこともなか。

従二位藤原公世りょうがくそうじょうの兄で、良覚僧正はるかという人は、どもこも腹搔きぶっつじゃった。

坊のかたわらに大か榎の木があつたけん、人々は「榎の木ふとの僧正」と呼うだが、この名が気に入らんちゅて、そん木バ挽っ切つてしもた。ばって、そん根のあつたけん今度は「きりくひの僧正」と呼ばれた。いよいよ腹搔ゃあて、きりくひを掘つてうっ捨てたところが、そん跡が大か堀になつたりゃ、こんだ「堀池の僧正」て呼ばれたげな。

柳原の辺りに「強盗法院ごうとうの」て呼ばれた僧がおらした。たびたび強盗に遭うたけん、こん名バつけられたてたい。

ある人が清水寺に参詣さしたとき、老いた尼さんと道連れになった。道中「くさめくさめ」と言いながら行かしたけん「尼御前、なんばそぎゃん言いよらすとナ」と尋ねたばって、返事もせんば、言い止めもさっさんじゃった。たびたび尋ねられて、ちった腹きゃあて「くしゃみばしたとき、こう、おまじないバせんば死ぬちゅうけん、比叡の山におる養い君が今くしゃみバするかもしれんて思い、こぎゃんいうたつた」

なかなか無か志じゃったこったい。

光親卿みつちかのきょうが後鳥羽上皇の院の御所で行われた、最勝講の奉行の役バして仕えていたとば、御前に召して食事バさせた。光親卿は食べ終わった食器バのせた衝重ついがさねバ御簾の中に入れて退出さした。女房たちが「まあきたなか。誰に片づけろちゅうちゃろかい」というと、上皇は「故実バわきまえたやりかたで、りっぱなことだ」ちゅて繰り返し感心さしたとの事たい。

老年になってから仏道修行バしゅうと待とったちやつまらん。古か墓ン多くは若っかうちに亡くなった人のものである。「昔いた高僧は、人が来て用事バいうとき「今、急ぐことがあって、もう朝夕に迫とる」て、耳バふさいで念仏バして、ついに往生バ遂げた」と禅林の十因にある。

心戒ちゅう高僧は、あまりにこの世がかりそめであることば思い、静かに座とることがなく、常に落ち着かんで、膝ひざバ立ててしゃがんでいたちゅうことたい。

応長の頃、伊勢の国から、女が鬼になったとば誰かが連れて、京都に来たちゅう事があって、そこそ二十日間ほど毎日、京・白川人たちが鬼バ見ゅうちゅて出歩いた。

「昨日は西園寺に参上しとった、今日は上皇の御所に参上すっじゃろう。今は、どこどこにおる」ちゅて言い合うとった。ばって、本当に見たという人もおらん。うそだとちゅう人も無か。ただ、鬼ンことばっかり言うとった。

そこそ、東山から安あぐあ居院のあたりへ行たところ、人々が「一条室町に鬼ンおる」ちゅて騒ぎたてて走っていく。人バやって見させたりゃ、やっぱり鬼に会うた者ナおらん。日が暮るるまでこがんだ騒ぎバして、しまいには喧嘩まで起こってあきれかえるちゅうこともあった。

そこそ世間で二・三日間、人々が病気になるちゅうことがあったとば、あん鬼の話は、この病氣ン前触れじゃったという人もおった。

後嵯峨院が、龜山離宮の池に大井川の水バお引きになろうてして、大井の土地ン人にお命じになって、水車バ造らせた。しかし、すこしも回らでにゃ役に立たんじゃったけん、今度は宇治の人たちバお呼びになって造らせらした。こん水車は思い通りに水バ汲みいれた。

何でもその道バ知ったもんナ尊かもんじゃある。

仁和寺にいたある僧が、年バとるまで石清水いわしみずに参拝せんじゃったとバ残念に思うて、あるとき思い立って、たったひとつで徒歩で詣でらした。極楽寺・高良こうらなどに詣で、これだけじゃろともて帰らした。

さて、友達に会うて「長年の思いバたした。聞いていた以上に尊かった。それにしても、参拝していた人が皆、山に登って行ったとは何じゃったじゃろかい。行ってみたかったばって、神に参拝することが本意じゃったけん、山までや見んじゃった」ちゅうた。

ちょっとしたことでん、先達はあってほしかもんばい。

これも仁和寺の法師。童が法師になろうとする名残ちゅうて、各自遊ぶことがあったとき、酔うてうかれるあまり、かたわん足あしかなえ鼎に頭バ押し込で舞い出たけん、座の人たち皆、たいそう面白がった。

しばらく舞った後、抜こうとしたばって抜けごてなってしもた。酒宴も興ざめて、どがしゅうろちゅうてうろうろしとった。色々したばって、首の周りは傷つき腫れ上がって息も詰まってきた。鼎バ割ろうとしても容易に割れん。医者に連れていたばって、医者も手の施しようがなか。

また仁和寺に帰って皆で悲しんどったりゃ、ある者が「耳や鼻が取れても命だけは助かっどもん、カバいれて引っかんがせ」ちゅうけん、首もちぎれるぐりゃ引っ張った。そしたりゃ、耳鼻がとれたもんの抜くこたでけた。危く命は助かったばって、長う病うどらした。

御室にどもこもかわいか児^{ちこ}がおったけん、誘い出ちゃーて遊ぼうて企む法師たちがおった。芸達者なあそび法師どもと相談して、しゃれた折詰バつくり、箱に入れて都合ン良かとこれ埋めて紅葉バ掛けておいた。

そして、児バ誘い出ちゃーて、さっきの箱バ埋めた辺りに座って、数珠バすりあわせたり、印形を結んだりしたあと、紅葉バどけてみたが何も見つからん。場所が違うたかて思うて、掘らん所もなかくらい探し回ったばって見つからんじゃった。

埋めとったとば人が見とって、児バ誘いぎゃ行った後、掘り出して持ってはってたっじゃろだ。

法師たちは言葉もなく、腹搔ちゃーて帰ってはってた。

あんまり面白がってすれば、こうなるもんたい。

家ン作り方は、夏バ旨とするが良か。冬はどがんとこころでん住まるる。暑っかときに悪か住居は、耐えにっか。

深か水は涼しげじゃか。浅うして流れとつとが涼しか。

細かっぱ見とつとに、遣戸^{やりど}は蔀の間より明かるか。天井の高っかとは冬寒うして、灯かりが暗か。造りは用のなか所バ造つとが、見た目も面白うして、いろいろな役に立って良かちゅうて、人々が議論した。

長い間離れとつと久しぶりに会うた人が、そん人に起こつたことばいろいろ喋り続つとはいやなもんばい。

良かん話するこた、大勢の中で一人に向かって言うたこととでん、自然にみんなが聞くもんだ。

良うなか人は、大勢の中に身バ乗り出して、今見とるかのごて話すけん、皆笑い騒ぐ。面白かことば言うても、さほど笑わんことと、おかしくもなかこっぱ言うても、ゆう笑うことで、品が測られるもんだ。

容姿や学問のことバ議論しとるとき、自分のことバひきあいに出ちゃーて言うるとにゃ閉口する。

人が語り出した歌物語で、歌が悪ければ不本意である。少しでんその道バ知つとる人は、優れていると思つては語らん。だいたい、ゆう知りもせんことバ語つとは、聞きづらかもんだ。

「求道心があつとなろ、何も住むところに関わるこたなか。出家後も家において人と交際しとつても、来世の極楽往生バ願うとに難しかことんあろうきゃ」ちゅう人は、来

世の往生というもんバ知らん人である。心静かでなからんバ仏道の修行は為しがたかもんである。

今ん人は昔ん人に器量が叶わんけん、たまたま世の利欲ばむさぼるかて思われるごたることもあるかも知れんばって、仏道に入って世を捨てるごたる人は、望みがあるちゅうても権勢の人は貪欲さとは違うとる。求むるもんナ容易で、すぐに足りてしまうのである。

人と生まれたんなら、何とかして俗世間バ逃るつとが望ましか。

大事バ思い立つような人は、避け難くうして心にかかるごたることは、そのまま元から捨ててしまうべきである。そうじゃからんば避けられんことばかり起こってしまう。

近か火で逃ぐる人は、「ちょっと待った」と言うどかい。自分の身バ助けるためにゃ、恥も財産も捨てて逃ぐるもんである。命は人バ待っていてくれん。生死のことは火や水よりかも早う、逃れられんもんである。

四十も過ぎた人で、情事めいたことが時たま蔭であつとは、こりゃまあ致し方なかとばって、表面だつて公に出して男女のことバ人の身の上や評判バ噂話にして冗談まがいに言うとは、年にも似合わず見苦しかもんゾ。

凡そ、聞き難うして見苦しかとは、年寄りが若者に交り興じて何かとしゃべつとること、つまらん卑しい身分でありながら、世の声望ある人でも親しげに言うたり、貧乏なくせに酒宴好きで、お客にご馳走しようとして派手にやっていることなんぞである。

友達に持つのにつまらん者が7つある。第一は身分の高っか人。第二は若っか人。第三には病氣バ持たず健康な人。第四には酒飲みの人。第五には武勇に走る兵士。第六には嘘バ言う人。第七には欲の深か人。

よか友が三つある。第一には物を呉るる友。第二は医者。第三は知恵ある人。

真乗院に盛親僧都という高僧がおらした。

この僧都は芋がしらが好きでようけ食べらした。仏典バ講義する席でも食べながら経典バ読んだ程だし、病氣ンときには、治療だちゅうて部屋にこもつて、一層よけえ食べてすべての病氣バ治さしたほどじゃった。

この僧都は、何事もすべて自分の勝手気尽で人に合わせるちゅうことはせんじゃったが、人々に嫌われず、すべて大目に見られとつた。人徳がちゃんと出来上がつとつたけんじゃろだ。

高貴な方の御産のとき、甑バ屋根から落とすということは、必ずすると決まっているわけじゃなか。御胞衣が滞^{とどこみ}つて下りんときのまじないである。

延政門院が幼少の頃、父の御嵯峨法皇の御所に参上する人に伝言として申し上げた歌ふたつ文字 牛の角文字 直ぐな文字 ゆがみ文字とぞ 君は覚ゆる

後七日の御修法の導師バ勤める僧が、警固の武士バ集めることは、いつのころか修法中に盗人にあつたところから、こがん仰々しくなつてもた。

一年の吉凶はこん修法中の有様に現つとだけん、こぎゃん法会に武士バ用いっとはおだやかじゃなか。

「五緒いつつおの簾すだバつけた牛車は、乗る人の身分によるものでなく、家柄に応じた最高の官位に達したら乗ることになっているものだ」ちゅて、ある方が仰せらした。

岡本関白殿が、花盛りの紅梅の枝に雉一つがいおんたかひやくバそろえて差し出せちゅて、御鷹飼役おんたかひやくの下毛野武勝しもつけのたけかつに命じらした。

武勝は「花はな咲いとる枝に雉けしバ取り付くる方法は知りません。またひとつの枝に二羽をつくることも存じません」ちゅうたりゃ、関白殿は「それならお前の思うとおりにつけて差し出せ」ちゅわしたけん、花もなか梅の枝に雉一羽けしバつけて差し上げた。

上加茂神社の末社の岩本社・橋本社の祭神は、在原業平・藤原実方(さねかた)である。人々がゆう二神の祭神バ取り違ゆるけん、ある年、参拜したとき、年とった神官に聞いてみたりゃ「実方が祀られたとは御手洗の川に姿ン映ったところて、されとりますから、橋本はやはり流れが近かけん実方でしょう。吉水和尚が、

月をめで 花をながめし いにしへの やさしき人は ここにありはらと詠んだのは、岩本の社のことて聞いとります」ちゅて礼儀正しく言うたとは立派じゃったと感じ入った。

筑紫国に何某ちゅう押領使おしりょうしンごたる役目の者がいた。大根バすべての病気に効くちゅて、毎朝二つずつ焼いて食べとった。

あるとき屋敷やしきン中に人がおらんときに敵が襲ってきた、屋敷やしきン中に武士が二人現れて、敵バ追い払うてしもた。

不思議に思うて、「日ごろ見ン方ですばって、どういう方ですか」てきくと「長年頼みにして毎朝召し上がっていた大根らでござす」と言って消えてしもた。

書山しやうざんの性空上人しやうくうしやうにんは六根が清浄な境地に達している人じゃらした。

豆まめバ煮ている音が「わしわしバ煮てひどかめにあわせよるね」と聞こえ、豆殻まめがらが焚かれる音は「おれが焼かるやかるっともやりきれんことばって、どうにもしよんなかことだ。そがそがん恨みなさんな」て聞こえたちゅた。

元応の宮中で清暑堂の御遊おとどンとき、玄上はすでに紛失してしもとったが、菊亭大臣きくどうが牧馬まぎちゅう琵琶びわバひいたとき、弦しんバ支ゆる琴柱ことばしらバさぐって調べていたところが、一つ落けてしもた。

大臣は懐なつこにそくひ(飯粒バ押しつぶして練ってつくった糊)バ持とったけん、それで取り付けらした。神様にお供えバあげとるうちにゆう乾いて、事無ことなしきを得た。

どういう恨みのあったっじゃいろ、見物けんぶつしていた衣ころもバかぶった女性が、牧馬まぎに近づいて柱はしらバはずして、元もとンごてつけといたということである。

名前バ聞けば、顔つきは想像さうざうでくる気のするばって、会うてみると予想通りの顔つきの人はおらんもんだ。昔物語バ聞いて、今いまん人の家の、どこそこあたりン事ことて思えるし、登場人物も、今いまん人の中に思い当たおぼったっじゃいろ、誰たれでん、そう感じるもんじゃろかい。

また、何かの拍子しやくしに、今、人ひとン言うた事とか、目にした物とか、心に思うた事が、以前いぜんにあったごたる心地こころがすっとは、私わたしだけん事ことじゃろかい。下品げひんなもの。

座まっているあたりに道具たぐいが多かおほかと。硯すずりに筆ふでが多かおほかと。仏堂ぶつどうに仏像ぶつぞうが多かおほかと。前裁まへざいに石いし・草木くさきが多かおほかと。家いえン中に、子こや孫まごが大勢おほしおおとと。人ひとに会うて口数くちすうが多おほかおとと。願文ねんぶんに

善行バ余計書いてあつと。

多くてもよかとは、文車の上ン書物。ごみ捨て場ンごみ。

世の中に語り伝ゆつとは、事實は面白うなかせんじゃいろ、多くは皆、根拠のなか話である。人は物事バ大きく言うてしまいやすかるとに、まして、年月が過ぎ、場所も離れてしまえば、言おうごたるごて語ったり、書いたりしてしまつと、そりが事實になつてしまふ。なんか物事の上手な人ん事とかは、そん道に詳しくなか人は、神業ンごて言うけれど、その道に詳しくか人は、あまり信用せん。見ると聞くとは、何でも違ふもんだ。

こぎゃんことも省みず、口にまかせて言い散らすとは、やがて根拠の無か事とわかる。自分も本当の事てにゃ思わんながらも、聞いたままン事バ話すとは、そん人の根拠のなか話じゃなか。真実らしく、所々ぼかして、それでいながら辻褃バあわせて語る嘘（根拠の無か事）は、恐ろしか。自分のことば良く言われとる嘘は、人は強く否定せん。みんなが面白がる嘘は、「それほどでもなかばつてね」と思いながら、しよんなしゃ聞いただけでも、証人にさえされて、事実ンごてなつてしまふ。

とにもかくにも、嘘の多か世の中である。普通の、珍しゅもなか事バ心得とれば、万事間違いなか。世の人ン言う事あ、驚く事ばかり。良か人は不思議な事あ語らん。

そうは言うても、仏神の靈験者の伝記ン場合は、信じるべきじゃなかつていうとじゃなか。だいたい、頭から信用せんばつて、疑うて嘲るべきじゃなか。

蟻のごて集まつて、東奔西走、身分の高っか人、低っか人、老いた人、若い人、行く所があり、帰る家があり、夜寝て、朝起きて、いったい一生懸命何バやつとつと。生バ貪り、利益バ求めて、止まることがなか。

自身バ養うて何バ期待すつと。ただ、老いと死である。それが、やつてくつとは速く、そして、止まることがなか。迷える人は、こんことば恐れん。利益に溺れ、先の短かことバ反省せんけんたい。愚かな人は、この、先が短かことば悲しむ。人生が永遠に続くことば願うて、変化の理バ知らんけんたい。

たいくつなのことばつらく思う人は、どういう気持ちじゃろかい。他に気がいかでにゃ、ただひとりおるのがよか。

世間にしたがえば、心が外の塵に惑わされやすか、人と交際すれば、言葉が人に聞いたものに流され、自分の気持ちじゃなか。人とたわむれ、争い、恨んだり、喜んだり、落ち着くことがなか。迷うとる上に、酔うて夢ば見とつと。人は、みな忙しゅして、こが調子である。

いまだに真の道バ知らんじゃつたつちや、世間バ離れて心静かにしてこそ、しばらく楽しめるといえるじゃろう。「生活・人事・伎能・学問等の諸縁バやめろ」て、摩訶止観にもある。

はなやかな人のところに、人々が大勢訪問する中に、聖法師が混じつて取り次ぎバ乞うて、たたずんどつとは、そぎゃん事バせんちゃて思う。

法師は、人と疎遠なのがよかろうで。

世の中ンうわさ話などバ、知つとるはずのなか人がよく知つとつて、人に話したり聞いたりしとつとは納得がいかん。ことに片田舎にいる聖法師などが言い散らしているら

しか。

いま風の珍しか事などバ、言い広めて、もてはやすことは、納得いかん。世間に言い
ふるされたことまでも知らん人は、好ましか。

はじめてン人がいるときなど、自分達にはなじみ深い事柄や、物の名などば片言だけ
言うて、目バ見合わせて笑いおうたりして、そんな事バよく知らん人に居心地悪うさること
は、世間慣れせず教養の低っか人が必ずする事である。

何事も、立ち入らんごてすつとがよか。優れた人は、知つとる事でん、さほど知って
いるごて言うどかい。片田舎から出てきた人ン方が、何でも心得ているかのごて話バす
る。世間の方でにゃ恥ずかしか事バ言うてにゃ思うばって、自分で立派て思うとる様子
が愚かしか。

ゆう知つとる事には、必ずあまり話さず、聞かれない限りは、自分から話さんとがよ
か。

誰もかりも、自分に縁遠か事ばかりバ好んどるごたる。法師ばかりでなく、上達部、
殿上人にも武術バ好む人が多か。

生きている間は、武勇バ誇っちゃいかん。武道ちゅうもんな、人間の道にはずれ、鳥
か獣に近か行為で、武士の家柄でもなかとに好んでも無益な事。

屏風や障子などの絵でん文字でん、見苦しか筆づかいで書いてあつとはそん家ン主人
が下品に見ゆる。古風のように大げさでなく、出費も少なうして品質の上等などがよか。

 [トップページへ戻る](#)